

# 柔道投技におけるフェイントの方法

三 戸 範 之

## Methods of Feints in Judo Throwing Techniques

Noriyuki SANNOHE

### Summary

The purpose of the present study was to examine methods of feints in judo throwing techniques by being based on movement structures. The participants were 11 national intercollegiate judo players and they gave demonstrations of their own favorite throwing techniques with the feints. A seventh-dan grade judo expert and 10 participants except for a demonstrator evaluated whether 32 demonstrations contained feints or not. By their agreement on each evaluation, 18 kinds of the throwing techniques with the feints were selected for the analysis. The impressionistic analysis by means of other-observation was conducted about the phase structures of the movement process in the throwing techniques with the feints. The results demonstrated that the methods of the feints were divided into two motions, which were Tsukuri and Kake of a certain throwing technique, and that the combination methods of the feints and the throwing techniques were divided into two sorts, which were the connections to either Tsukuri or Kake of the throwing techniques. Sannohe (1999) advanced a theory that judo throwing techniques could be classified into two types: rotation and non-rotation. Binomial tests indicated that when the type of the feints was rotation and the type of the throwing techniques was non-rotation, there was a significant difference between two combination methods : 0 connections to Tsukuri and 7 connections to Kake, and that when the type of the feints was non-rotation and the type of the throwing techniques was rotation, there was a significant difference between two combination methods : 8 connections to Tsukuri and 0 connections to Kake. Results are discussed with relation to practice and instruction in feints in judo throwing techniques.

Key words: Judo, Throwing Technique, Feint, Movement Structure

### はじめに

柔道投技においてフェイントは、相手に掛けようとする技を覚られないようにし有効な防御動作をさせないようにするために行なう動作である。スポーツにおいては、目的を達成するための計画された運動の詳細な方法や指示を戦術と呼び、戦術には攻撃と防御の戦術がある(ケーン, 1998)。柔道投技におけるフェイントは、攻撃の戦術であるといえる。柔道において競技力向上のためには、得意な投技を習得することが重要であるとされている。習得した投技を効果的に用いるために、戦術的な技能を向上させることが有効であり、フェイントは投技における重要な戦術の一つとしてとらえることができる。フェイントは、柔道だけでなく様々なスポーツで相手の防御を乱すために用いられる場面がみられる。フェイントは、相手にやろうとしている運動を分からせないようにし、誤った反応をさせようとするみせかけの動作である(マ

イネル, 1981, p. 234)。

柔道において、フェイントという用語はこれまであまり使われてこなかった。そのため、柔道におけるフェイントの方法に関する研究は、ほとんどみられないのが現状である。金子(2003, pp. 315-316)は、スポーツ科学においてフェイントの動き方そのものに関する研究がほとんどなされてこなかったことを指摘している。この理由として、フェイントには相手をごまかすような後ろめたい印象があることを推論している。

しかしながら、フェイントは対人的な種目や球技などにおいて重要な戦術であると考えられる。そして、金子(2003, p. 316)が「奇想天外なフェイントの発想さえあれば、後は、そう動けばよいのだし、改めてトレーニングをして身につけるほどむずかしいことではない」とする考え方を批判しているように、フェイントは習得するために練習の対象となるものであるといえる。柔道に関

する研究や論考には、「フェイントのような技とは認められないような動作から技への連絡」(平野ら, 1994), 「意表に出たつくりだけの動作にとどめて相手の体勢を崩し、巧みに連絡して次の極め技で制する」(松本, 1994, p. 263)などと、フェイントを示すと考えられる記述がみられる。このように柔道において、フェイントは用語としては定着していなくとも、実際には投技を効果的にする戦術として習得され、しばしば用いられていると考えられる。

このようななかで三戸ら(1999)は、柔道における投技を効果的に用いるための戦術として、連絡技, 変化技, フェイントからの投技, および移動動作からの投技などがあることを指摘した。ここでフェイントが、柔道投技の戦術を示す用語として明確に用いられた。また、神谷(1998)はフェイントの方法について、柔道指導関係書籍における記述をもとに考察し、運動学的な分類理論を提唱した。ここでは、投技におけるフェイントの方法が、その機能から、空間に力点を置く方法と時間に力点を置く方法に分類された。空間に力点を置く方法は主に技の種類について誤った反応をさせ、時間に力点を置く方法は主に技のタイミングについて誤った反応をさせる方法である。さらに神谷は、これら2つの方法について、分析の視点を変えて、フェイントの局面構造や運動リズムに着目することにより、それぞれ2つの方法に分類した。神谷の研究は、柔道投技のフェイントの方法について運動学的に解明するという斬新な試みであるが、分析の視点に一貫性がみられなかった。

ところでマイネル(1981, pp. 234-235)は、フェイントには、ある運動の導入動作を用いるものと、主要局面の動作を用いるものがあることを指摘している。そして、フェイントとこれに続く運動については、みせかけの運動からほとんどの場合直接次の運動の主要局面に続くことを指摘している。このフェイントについての理論的枠組みを柔道投技に適用すると、フェイントの動作には実際には掛けない技の導入動作や主要局面の動作を用い、フェイントから投技への連絡は直接投技の主要局面につながるが多いと予測できる。

このようなとらえ方は、フェイントにおける運動の局面構造に着目した可視的なものであるといえる。マイネル(1981, p. 155)は、局面構造が運動リズムとともに運動構造の概念の内容をなし、可視的に運動経過を明らかに区別できる一定の諸局面に分節化するものであることを指摘している。スポーツ運動を可視的にとらえることは、示範を行ったり運動の課題を提示したりするうえで、指導場面における効果的な活用が期待できる。柔道投技のフェイントの方法について局面構造に着目して検討することは、指導場面において有用であると考えられる。

本研究においては、柔道投技のフェイントの方法について、指導場面で有効に活用することを視野にいれ、運動経過の局面構造を運動観察により分析を行い検討したい。本研究の目的は、柔道投技におけるフェイントの方法について運動構造の視点から検討することである。本研究は、柔道投技の指導法の工夫や改善に資するための、スポーツ運動学的研究である。

## 方法

### 1 フェイントからの投技

柔道は相手と組み合い、技を用いて攻防する特性を持つことから、多くの選手が、掛ける投技を分からせないようにし誤った防御反応をさせるために、フェイントを用いていると考えられる。本研究では、柔道選手が実際に用いているフェイントからの投技を分析対象として抽出することとする。対象とする柔道選手は大学生11名で、全日本学生柔道大会出場競技水準である。

柔道7段の者と施技者以外の大学生柔道選手10名、計11名が施技の運動経過を観察し、10名以上が一致してフェイントであると認めたものを分析対象とする。10名以上が一致することを基準とするのは、二項検定において、合計数11のとき10対1の組み合わせが5%水準で有意であることによる。

### 2 手続き

大学生柔道選手11名に対し、柔道の投技のフェイントについて理解を統一させるために、フェイントは掛ける技を分からせないようにし誤った防御反応をさせるために行う「みせかけの動作」であることを説明する。

次に、本研究のために作成したフェイントの調査票に、それぞれが乱取りや試合で用いるフェイントからの投技を記入させる。記入されたフェイントからの投技をそれぞれに施技させ、柔道7段の者と施技を行う者以外の10名の選手計11名がこれを観察し、運動経過にフェイントと認めることができる動作が含まれているかについて評価票を用いて評価する。また、施技をビデオに収録し、パーソナルコンピューターにより、分析に用いるための運動経過の図を作成する。

### 3 分析方法

フェイントの方法、およびフェイントから投技に連絡する方法の2点について検討する。フェイントから投技で投げ終えるまでの運動経過の局面構造について、他者観察による印象分析を行う。マイネル(1981, pp. 234-235)のフェイントに関する理論的枠組みをもとに、フェイントの方法については、実際には掛けないみせかけの投技の準備局面と主要局面でどちらの動作を用いているかを検討する。フェイントから投技に連絡する方法については、フェイントから次の投技のどの局面につなが

っているかを検討する。また、フェイントの方法、およびフェイントから投技に連絡する方法について、投技の種類との関連性について分析を行う。

投技の局面構造のとらえ方と投技の種類は、三戸ら(1999)にしたがうこととする。すなわち、投技の局面構造は準備局面を「つくり」および主要局面を「掛け」とする(図1)。投技のなかで、立った姿勢で技を掛け

る立技の運動構造を基準とする分類として、相手と対面して掛ける技を「非回転」系、相手に背を向けて掛ける技を「回転」系とする。また、投技を掛ける者と掛けられる者については、柔道の用語にもとづき投技を掛ける者を「取」、掛けられる者を「受」とする。フェイント、および投技の運動方向は、受を基準にして、正面方向と背面方向とする。

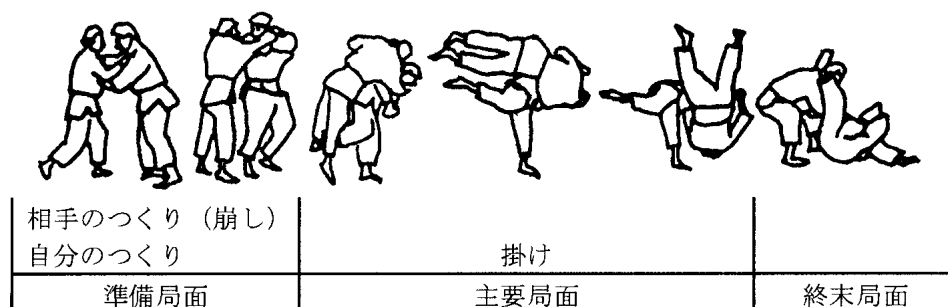


図1 投技の局面構造(三戸ら, 1999より)

## 結果

大学柔道選手11名を対象とした調査票により、32のフェイントからの投技が得られた。これら32のフェイントからの投技の施技について、運動観察を行い、評価の一致度により20のフェイントからの投技を選択した。このなかで同一のフェイントからの投技とみなせるものを1つにまとめ、18のフェイントからの投技を分析対象とした。表1は、18のフェイントからの投技をフェイントの動作とフェイントから連絡する投技に区分し、類型(表中、括弧内)、フェイントの方法、および連絡の方法について分析結果を示したものである。表1におけるフェイントの動作は、みせかけの投技を特定できる場合は技名を示し、特定できない場合は動作を示した。

表1 フェイントからの投技: 類型および方法

フェイントの動作	投技	方法	
		フェイント	連絡
1 袖釣込腰のつくり(回転)	体落(回転)	つくり	つくり
2 大内刈(非回転)	体落(回転)	掛け	つくり
3 小外掛(非回転)	体落(回転)	掛け	つくり
4 内股(回転)	体落(回転)	掛け	掛け
5 小内刈(非回転)	袖釣込腰(回転)	掛け	つくり
6 一本背負投(回転)	大内刈(非回転)	掛け	掛け
7 大外刈のつくり(非回転)	大内刈(非回転)	つくり	掛け
8 内股のつくり(回転)	大内刈(非回転)	つくり	掛け
9 内股のつくり(回転)	大内刈(非回転)	つくり	掛け
10 内股のつくり(回転)	小外掛(非回転)	つくり	掛け
11 足を前に大きく振り上げる(回転)	小外掛(非回転)	つくり	掛け
12 一本背負投(回転)	大外刈(非回転)	掛け	掛け
13 足を前に大きく振り上げる(回転)	大外刈(非回転)	つくり	掛け
14 大内刈(非回転)	内股(回転)	掛け	つくり
15 小外掛(非回転)	内股(回転)	掛け	つくり
16 小外掛(非回転)	内股(回転)	掛け	つくり
17 大外刈のつくり(非回転)	内股(回転)	つくり	つくり
18 出足払(非回転)	巴投(回転)	掛け	つくり

## 1 フェイントの方法

### (1) フェイントの方法の分類

18のフェイントからの投技について、フェイントの動作を局面構造の視点により印象分析を行った結果、表1に示すとおり、フェイントの方法はみせかけの投技の「つくり」の動作を用いる方法と「掛け」の動作を用いる方法に分類でき、他の方法は認められなかった。

フェイントの方法は、18種類のフェイントからの投技のうち、8種類がみせかけの投技の「つくり」の動作を用いるものであった。このなかから、典型例として表1における「10内股のつくりから小外掛」の運動経過を図2に示す。図2によると、取は「つくり」の動作を用いて身体を移動させ、同時に受を正面方向に崩そうとしている。取はフェイントの動作をここで終了し、フェイントにおける崩しの方法と逆方向、すなわち受の背面方向に小外掛を掛けている。このように、みせかけの投技の「つくり」の動作を用いるフェイントは、「つくり」における取の移動動作と崩しの動作により、受に掛ける投技を分からせないようにし誤った防御反応をさせているといえる。

フェイントの方法は、18種類のフェイントからの投技のうち10種類が、みせかけの投技の「掛け」の動作を用いるものであった。このなかから、典型例として表1における「14大内刈から内股」の運動経過を図3に示す。図3によると、取は大内刈の「つくり」に続き「掛け」の動作を行っている。取はフェイントの動作を「掛け」の動作の途中で中断し、大内刈における「掛け」とは逆方向、すなわち受の正面方向に内股を掛けている。

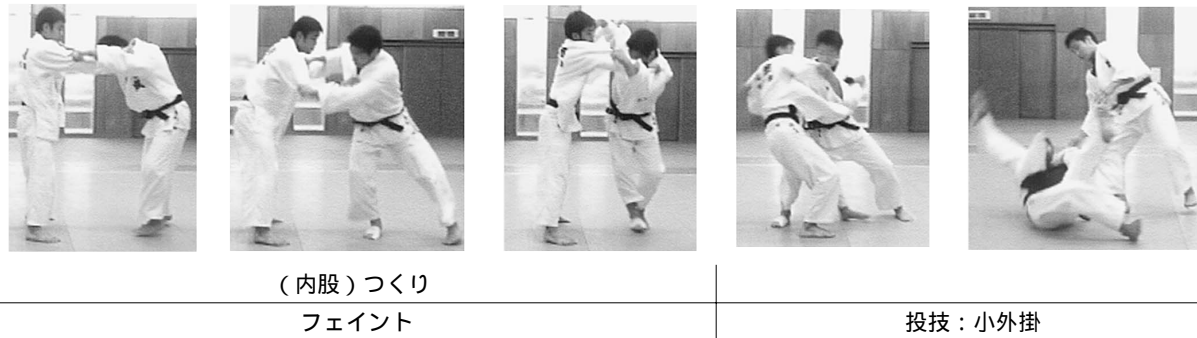


図2 フェイントの方法：つくりの動作をフェイントに用いる方法（内股のつくりから小外掛）

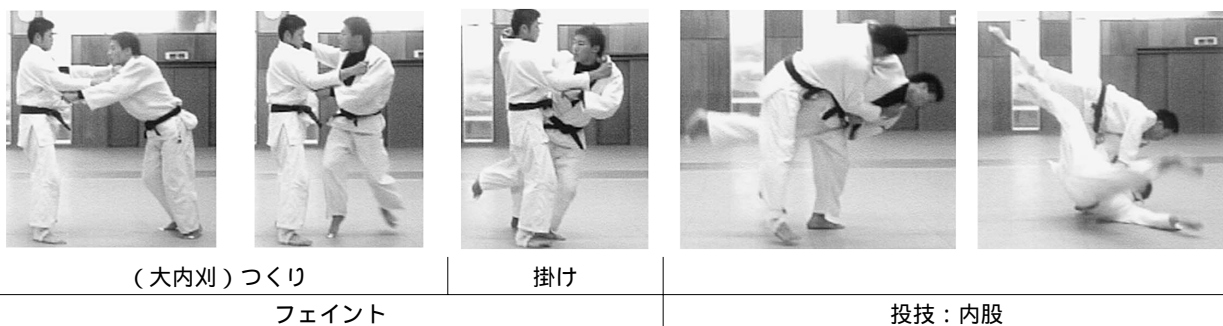


図3 フェイントの方法：掛けの動作をフェイントに用いる方法（大内刈から内股）

このように、みせかけの投技の「掛け」の動作を用いるフェイントは、「掛け」の動作を途中まで行うことにより、受に掛ける投技を分からせないようにし誤った防御反応をさせているといえる。

## (2) 投技の種類とフェイントの方法

表2は、フェイントとして用いる投技の種類、すなわち「回転」系および「非回転」系ごとに、フェイントとして「つくり」を用いる方法と「掛け」を用いる方法の数を集計したものである。表2によると、「回転」系および「非回転」系、両方の類型において、フェイントとして投技の「つくり」を用いる方法と「掛け」を用いる方法の技数に有意な差はみられなかった。したがって、フェイントとして用いる投技が「回転」系、「非回転」系どちらの場合でも、フェイントの方法として投技の「つくり」と「掛け」を用いる傾向に差があるとはいえない。

表2 投技の種類とフェイントの方法

投技の種類	回転	フェイントの方法		二項検定
		つくり	掛け	
		6	3	n. s
	非回転	2	7	n. s

(注)表中の数値は、フェイントからの投技の数

## 2 フェイントから投技への連絡

### (1) フェイントから投技への連絡方法の分類

18種類のフェイントからの投技について、フェイントから投技に連絡する動作を局面構造の視点により印象分析を行った結果、表1に示すとおり、フェイントから投技に連絡する方法は、フェイントから投技の「つくり」に連絡する方法と「掛け」に連絡する方法に分類でき、他の方法は認められなかった。

フェイントから投技に連絡する方法は、18種類のフェイントからの投技のうち9種類が、フェイントから投技の「つくり」に連絡するものであった。このなかから、典型例として表1における「2大内刈から体落」の運動経過を図4に示す。図4によると、フェイントとして大内刈の「掛け」の動作を途中まで行い、「つくり」の動作を経て体落を掛けている。このように、フェイントから投技の「つくり」に連絡する方法においては、「つくり」の動作を用いることによりフェイントから連絡して投技を円滑に掛けているといえる。

フェイントから投技に連絡する方法は、18種類のフェイントからの投技のうち9種類が、フェイントから投技の「掛け」に連絡するものであった。このなかから、典型例として表1における「4内股から体落」の運動経過を図5に示す。図5によると、フェイントとして内股の「掛け」の動作を途中まで行い、「つくり」の動作を

## 柔道投技におけるフェイントの方法



図4 フェイントから投技への連絡の方法：つくりに連絡する方法（大内刈から体落）

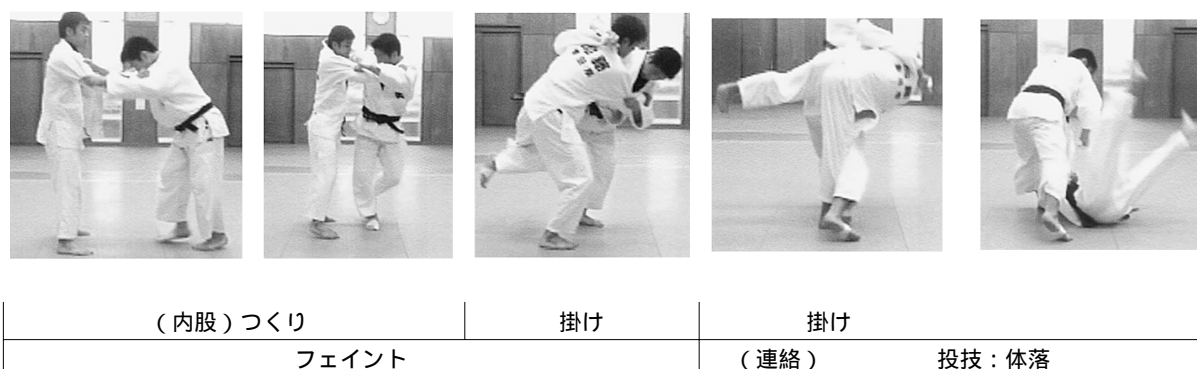


図5 フェイントから投技への連絡の方法：掛けに連絡する方法（内股から体落）

経ずに体落を掛けている。このように、フェイントから投技の「掛け」に連絡する方法においては、「つくり」の動作を経ずにフェイントから直接「掛け」に連絡することにより、フェイントから投技を円滑に掛けているといえる。

## (2) 投技の種類と連絡の方法

表3は、フェイントから投技への連絡について、投技の種類ごとに、フェイントから投技の「つくり」に連絡する方法と「掛け」に連絡する方法の数を集計したものである。投技の種類は、フェイントと投技で「回転」系および「非回転」系2種類を組み合わせ、「回転・非回転」、「非回転・回転」、「回転・回転」、および「非回転・非回転」の4種類とした。18のフェイントからの投技のうち、「回転・非回転」が7、「非回転・回転」が8、「回転・回転」が2、および「非回転・非回転」が1であった。「回転・非回転」および「非回転・回転」の合計15のフェイントからの投技を分析することとし、「回転・回転」、および「非回転・非回転」は少数であることから分析から除いた。

表3によると、投技の種類が「回転・非回転」の場合、「つくり」に連絡する方法が0、「掛け」に連絡する方法が7であり、二項検定の結果偏りは有意であった ( $p < .05$ )。したがって、「回転」系の投技を用いるフェイン

トから「非回転」系の投技に連絡するときは、フェイントから投技の「掛け」に連絡する傾向があるといえる。表3によると、投技の種類が「非回転・回転」の場合、「つくり」に連絡する方法が8、「掛け」に連絡する方法が0であり、二項検定の結果偏りは有意であった ( $p < .01$ )。したがって、「非回転」系の投技を用いるフェイントから「回転」系の投技に連絡するときは、フェイントから投技の「つくり」に連絡する傾向があるといえる。

表3 投技の種類とフェイントから投技への連絡の方法

投技の種類 (フェイント・投技)	連絡の方法		二項検定
	つくり	掛け	
回転・非回転	0	7	$p < .05$
非回転・回転	8	0	$p < .01$

(注) 表中の数値は、フェイントからの投技の数

## 考察

### 1 フェイントからの投技と連絡技

フェイントは、相手に誤った反応をさせようとする、みせかけの動作である。柔道においては、フェイントから連絡して投技を掛けることにより、投技を効果的に用いることができる。柔道では、自分の技から自分の技に連絡することを連絡技と呼んでおり、フェイントという用語はほとんど用いられていない。松本(1994, p. 263)

は、連絡技には、「一本に極めるねらいをもって技が掛けられ、相手が残した体勢に乗じて、第2, 第3の技を矢継ぎ早に発して極める」、「第1の技を意図的に軽く掛けて、第2, 第3の技のつくり、掛けへの補助的手段とする方法」があることを述べている。そして、「意表に出たつくりだけの動作にとどめて相手の体勢を崩し、巧みに連絡して次の極め技で制する」や「逆モーションから投技を掛けること」など、ある投技の「つくり」の動作を行ってから別の投技を掛けることも連絡技に含めて解釈できることを指摘している。

本研究において、フェイントの方法には、「つくり」の動作を用いる方法と「掛け」の動作を用いる方法の2つがあることを明らかにした。ここで前述の松本による連絡技の方法のうち、「掛け」の動作を、「つくり」の動作をフェイントとして用いて投技に連絡しているといえ、本研究の知見と一致する。柔道においてフェイントは、有効な戦術として使用されてきたが、連絡技として大きくまとめてとらえられることが多かったため、用語としては定着してこなかったと考えられる。

このように、柔道においてフェイントから連絡して投技を掛けることは、連絡技の一技法としてとらえることができる。連絡技は、最初の技が不十分なき次の技を掛ける方法、すなわちフェイントを用いない方法と、最初の技の「つくり」や「掛け」の動作をフェイントにして次の投技を掛ける方法、すなわちフェイントを用いる方法の2つに大別できるといえる。フェイントを用いずに最初の技が不十分なき次の技を掛ける方法においては、最初の技はあくまでも相手を投げることを意図して掛けられる。これに対して、最初の技の「つくり」や「掛け」の動作をフェイントにして次の投技を掛ける方法においては、最初の技はみせかけで、これに対する防御反応をさせることを意図して行われる。

したがって連絡技において、フェイントを用いないで投技から投技に連絡する方法とフェイントから投技に連絡する方法とでは、動作のこつが異なると考えられる。連絡技の習得に際しては、連絡技には最初の技をフェイントとして用いるか用いないかで大別して2つの方法があること、またフェイントの動作には「つくり」を用いる方法と「掛け」を用いる方法があることを理解して指導や練習を行うことが重要であると考えられる。

## 2 フェイントの運動構造的特性と指導・練習

柔道投技の運動経過における局面構造から、「つくり」は準備局面、「掛け」は主要局面ととらえることができる(三戸, 1999)。本研究における、柔道投技のフェイントの方法には「つくり」または「掛け」の動作を用いる2つの方法があるという知見は、マイネル(1981, pp. 234-235)がフェイントについて導入動作(準備局面)

を用いる方法と主要局面の動作を用いる方法があるとする指摘と一致する。このように、マイネルが球技や格闘技においてフェイントがみられることを指摘するなかで、これらの種目において、フェイントに準備局面または主要局面の動作を用いることは共通している可能性があると考えられる。

マイネル(1981, p. 234)は、球技を例にし、フェイントとしてわざと大げさな導入動作が用いられることを指摘している。このように、フェイントは、その目的を達成するために、ある特徴的な動作を含んでいると考えられる。柔道において、投技を掛けるときは、相手に気づかれないことや防御反応を行にくくするほうが有利であるといえる。しかしフェイントにおいては、実際には掛けない技を、掛けるように相手にみせかけ、フェイントの動作に対する防御反応を行わせることが重要であるといえる。したがって、フェイントは本物に似せた動きを行う演技的な要素を持つものの、フェイントとしての「つくり」や「掛け」は、技を実際に掛けるときとは異なる動作を行う必要があるといえる。

このように、柔道投技におけるフェイントの技能向上のためには、実際に投技を掛けるときとは異なりフェイントとして用いる投技の「つくり」や「掛け」の動作を、相手が気づいて反応しやすくなるように工夫し習得させる指導や練習が重要であると考えられる。フェイントに「つくり」の動作を用いるものとして、表1における「10内股のつくりから小外掛」の運動経過を観察すると、図2に示すとおり、腕を大きく振り上げ「つくり」の動作をおおげさにしていることが分かる。表1における「11足を大きく振りあげてから小外刈」、「17大外刈のつくりから内股」などにおいても、おおげさな「つくり」の動作がみられる。フェイントに「掛け」の動作を用いるものとして、表1における「2大内刈からの体落」の運動経過を観察すると、図4に示すとおり「掛け」の動作の一部を軽く行っていることが分かる。

また、運動構造による投技の種類の違いからフェイントの方法を分析した結果、「回転」系および「非回転」系、両方の類型において、フェイントとして投技の「つくり」を用いる方法と「掛け」を用いる方法に傾向の違いはみられなかった。本研究において分析対象となったのは18のフェイントからの投技である。分析に用いるフェイントからの投技の数を増やすことにより、投技の運動構造による類型とフェイントの方法の関連性について検討を深めることが期待でき、これは今後の課題である。

## 3 連絡動作の運動構造的特性と指導・練習

マイネル(1981, p. 161)はフェイントから次の動作に連絡する方法について、ほとんどの場合直接主要局面

につながることを指摘している。フェイントの後で次の動作の準備局面を経ずに直接主要局面につなげることは、時間的な損失を少なくしフェイントに反応している相手を即座に攻撃する効果があるといえる。柔道投技においてもフェイントから投技に連絡する方法は、フェイントにより相手が誤った反応をして投技のために効果的に崩れているならば、フェイントから直接投技の「掛け」に連絡する方が有利であるといえる。しかし、本研究においては、フェイントから投技に連絡する方法は、主要局面「掛け」に連絡する方法だけでなく、準備局面「つくり」に連絡する方法があることを明らかにした。柔道には67の投技があり（全日本柔道連盟, 2004）、これらの技の掛け方にはいくつかの運動構造的な違いがみられる（三戸, 1999）。このような中で、フェイントから投技に連絡する方法は「掛け」に連絡するだけでなく、「つくり」に連絡するほうが適切な場合があるものと考えられる。

そこで本研究において、投技の運動構造による種類の違いから連絡の方法を分析した結果、フェイントが「回転」系で投技が「非回転」系のときは、直接「掛け」すなわち主要局面に連絡する傾向があり、フェイントが「非回転」系で投技が「回転」系のときは、「つくり」すなわち準備局面に連絡する傾向があるという知見が得られた。「回転」系の技の「つくり」や「掛け」の動作をフェイントとして「非回転」系の投技に連絡するときは、「つくり」を経ずに直接「掛け」に連絡して時間的な損失を少なくしていると考えられる。「非回転」系の技の「つくり」や「掛け」の動作をフェイントとして、「回転」系の技に連絡するときは、時間的な損失があっても、動作を滑らかに正確に行うために「つくり」に連絡するほうがより適切であるものと考えられる。

フェイントから投技に連絡するときの取と受の位置関係に着目すると、「回転」系のフェイントから「非回転」系の投技を掛けるときは、取が受に対して背を向けてから反転して正体する。このときは、フェイントから投技の「掛け」に連絡する傾向がある。また、「非回転」系のフェイントから「回転」系の投技を掛けるときは、取が受に対して正体した位置から反転して背を向ける。このときは、フェイントから投技の「つくり」に連絡する傾向がある。フェイントからの投技において、取が受に対して背を向けてから正体する動作に比べ、正体した位置から反転して背を向ける動作のときには、素早く円滑な動作が難しいため「つくり」に連絡する方法が用いられるものと考えられる。しかしながら、投技の種類の違いにより連絡の方法がなぜ異なるかについてのより詳しい分析は、今後の検討を待ちたい。

フェイントから投技に連絡する動作においては、「つ

くり」に連絡する方法と「つくり」を経ずに「掛け」に連絡する方法があり、フェイントと投技の種類に応じて適切な方法を習得させる指導や練習が重要であると考えられる。

### おわりに

柔道投技におけるフェイントの方法について運動構造の視点から検討することを目的とし、フェイントからの投技について、大学柔道選手を対象に施技の運動経過を局面構造の視点により印象分析を行った。その結果、フェイントの方法には、「つくり」の動作を用いる方法と「掛け」の動作を用いる方法の2つの方法があること、フェイントから投技に連絡する方法には、「掛け」に連絡する方法と「つくり」に連絡する方法があることを明らかにした。また、投技の運動構造的な種類の違いから連絡の方法を分析した結果、フェイントが「回転」系で投技が「非回転」系のときは、「掛け」に連絡する傾向があり、フェイントが「非回転」系で投技が「回転」系のときは、「つくり」に連絡する傾向があることを明らかにした。

柔道においては、多くの投技があるなかで、いくつかの得意な投技を習得することが重要である。この投技の効果を高めるうえで戦術的な練習は欠かせないものであり、フェイントは柔道投技における重要な戦術の一つであると考えられる。しかし、フェイントは柔道においてこれまで用語としてほとんど用いられず、その方法に関する研究も乏しいのが現状である。そして多くの場合、フェイントから投技を掛けることは、投技から投技への連絡技として一括りにまとめてとらえられてきた。

柔道においてフェイントが注目されてこなかった理由として、フェイントは、投技に習熟していればあとは発想がよければうまくいくものであり、練習して習得しなければならないものではないとする考え方が横たわっているのではないかと考える。そして、フェイントの方法については、個人の発想を重要視するあまり、個人的な技法の枠を超え一般化した技術を炙り出すことは難しいことであり、また重要なことではないと考えられてきたのではないかと考える。しかしながら、金子（2003, p. 316）がフェイントについて、発想さえあれば動けるとする考え方を批判しているように、フェイントは戦術的な技能向上のために運動課題として練習の対象となるべきものであるといえる。

本研究において、柔道投技におけるフェイントの方法について検討し、フェイントを練習し習得するうえでの、柔道投技の指導法に関する基礎的な知見を得ることができたと考えられる。

## 文 献

- 平野弘之・貝瀬輝夫ほか(1994). 柔道の投げ技における連絡変化に関する一考察. 東京学芸大学紀要 5 部門, 46, 167-174.
- 神谷忠昭(1998). 柔道の投げ技における「技」および「戦術」の分類に関する研究. 秋田大学修士論文.
- 金子明友(2003). わざの伝承(再版). 明和出版.
- ケーン J. 朝岡正雄・水上一・中川昭監訳(1998). スポーツの戦術入門. 大修館書店, p. 17.
- 松本芳三(1994). 柔道のコーチング(6版). 大修館書店.
- マイネル K.: 金子明友訳(1981). スポーツ運動学. 大修館書店.
- 三戸範之(1999). 運動構造を基準とする柔道投技の分類に関する研究. スポーツ運動学研究, 12, 105-115.
- 竹内善徳(1979). 柔道. 不昧堂出版.
- 全日本柔道連盟(2004). 審判員マニュアル(2版). 全日本柔道連盟, p. 101.